

# アラビア半島の世界化する年における移民、労働者、ビジネス

アンドリュー・ガードナー

ピュージェット・サウンド大学人類学部准教授

2014年9月17日

ardner@pugetsound.edu

## 1. はじめに

本稿では、いくつかの事例を取り上げ、今日の湾岸アラブ諸国を特徴付けるいくつかの習慣、通念、関係を説明する。これらの事例は湾岸アラブ諸国社会の全貌を明らかにするものというよりも、私の10年以上にわたるアラビア半島社会の人類学的研究から抽出された事柄であり、そうした事柄の主要な部分や言及すべき価値のある側面を提示するものである。私の研究の中心的な課題は湾岸諸国への移民労働者の国境を越えた流入であるが、一方では移民受入国の国家と社会に焦点をあてる研究を定期的に行ってきた。私が今回提示するのは、こうした様々な関心を統合したものである。

## 2. 湾岸諸国の歴史と人口

アラビア半島の人々とその社会に焦点をあてた学術的言説において、GCCを構成する各国の非常に独特な歴史的経験を理解することに多大な努力が払われてきた。こうした豊かな言説から我々が学び取るところは多いが、こうした言説は湾岸諸国が今日まで辿ったもう一つの道を覆い隠してしまうことがある。それぞれの国が固有の、他とは異なる歴史を有しているものの、豊富な天然資源を持つという共通性、そしてまたオスマントルコやイギリスの植民地主義的支配といった共通性によって、地理的、環境的、文化的、民族的に一つの歴史を編んできたともいえる。今日においてさえ、多くの家族、氏族、部族が国境を越えて関係を維持しており、いくつかの支配家系は系譜上にも繋がっている。経験を共有することで編み出されてきた歴史のもう一つの側面とは、接触と交流のシステムによるローカルな地域とグローバル世界の相互連結性の長い歴史である。これは、アラビア半島の人々の特徴としてしばしば言及される島国性とは全く対照的だ。相互連結性はアラビア半島の人々が歴史的に発揮してきた移動能力と関連している。この移動能力は、アラビア半島内陸部の広大な砂漠を生きる「バドゥ」と呼ばれる遊牧民の生活に根源的に備わっているもので、そしてまた「ハダル」と呼ばれる都市住民が船乗りとして生活や真珠採取、インド洋世界における貿易活動に由来する。こうした元々存在していた相互連結性は植民地

時代になって初めて強化され、それによってアラビア半島が千年に渡ってコスモポリタンな文明の十字路で有り続けてきたという歴史が強調されるにいたったのである。

今日、GCC諸国はその石油資源の富とその富が築いてきた世界的な地位が知られているところである。カタルは、私が過去5年間注目している国であるが、最も典型的な事例であろう。なぜなら、カタルは国民一人当たりのGDPが世界で最も高く、また大金持ちがもっとも集中している国である。こうした状況はクウェイトやUAEとは異なる<sup>1</sup>。しかしながら、100年前には御木本幸吉が養殖真珠の商業生産に成功したことにより、この地域の基幹産業が損害を受けることとなった。困難で赤貧の時代とそれに続くイギリスの植民地支配の後、20世紀後半になって湾岸アラブ諸国は独立した。その石油・天然ガス収入はアッラーからの恵みと解釈され、砂漠の民と国家をかつてない高みに導いた。新しいナショナリズム、国民の人口規模の小ささ、過去40年にわたる急激なインフラ整備と社会開発といった要素が結びつくことで、GCC諸国が共有する経験というものが特徴づけられる。

部外者の目から見れば、湾岸アラブ諸国の国民は均質で、それは湾岸流の服装やスタイルというもので単一のモードを持っているかのように見える。しかし実際には、湾岸アラブ諸国の住民は多様性を持っている。前述の通り、アラビア半島の住民は、内陸部の遊牧集団に遡ることができるバドゥと、都市部の商人や海上貿易商人に起源を持つハダルに分けられる。しかしこうした分け方は、数多ある区分の一つに過ぎない。スンナ派とシーア派という分類もある。さらに、またペルシャ系移民も存在し、その中には新しい移民と古くからいる移民にも分けられる。彼らの中には、アラブ民族だと自称する者もある。また、アフリカから連れてこられた奴隷の子孫であるアブドゥという集団も存在する。これら全ての多様な集団が、再び活発になってきた部族意識と織り混ざることになった。この部族意識とは、民族という概念よりも個々の違いを強調するものでありながら、かといって大家族という枠組みよりも包括的であるような意識を指す<sup>2</sup>。これら全てのアイデンティティ形成は、人口的にはより巨大な外国人労働者、外国人専門家、そして外国人滞在者という湾岸アラブ社会を背景に発生したものであった。

こうした多様性の中にあって、アラブの社会と国家の中心の特徴は、ナショナリズムと同時に支配家系と部族の正統性を形成・維持することである。彼らの今日の活動の大半は、こうした事に結びつけられている。グローバルな巨大プロジェクトを招致することは、こうしたナショナリズムを活気づけるためのものだ。華やかな巨大都市の建設は、世界中の観客に対する一風変わったナショナリズムの主張である。博物館等々に見られるこの地域

<sup>1</sup> この数値はアメリカドルによる。ドーハの全世帯の14%は個人保有の財産として少なくとも100万ドルを保有している (The Boston Consulting Group Global Wealth 2013 report)。

<sup>2</sup> Alshawi and Gardner (2013) *Tribalism, Identity and Citizenship in Contemporary Qatar*. *Anthropology of the Middle East* 8(2)およびCooke (2014) *Tribal Modern*, Berkeley: University of California Press を参照。

の伝統文化産業の活況は、単一のナショナリズムを作り上げようとする手の込んだ試みだ。これらの活動は、世界中の人々を意識して新たに作り上げられた、国際的で近代的なイメージを作り出そうとするもので、そして同時にこの発展を指導した支配者の寛大さを示すものだ。

### 3. 開発と都市開発

開発はこうしたシステムを支える基盤だ。この意味で、開発とはつまり社会開発としてのインフラ開発、社会開発とはこれらの国家の最重要活動といえる。ここではこの主張を以下の3点で簡単に紹介しよう。第一に、全てのGCC諸国において、ほぼ全ての国民は公的部門に就労する。彼らは直接に国家のために働いているのだ<sup>3</sup>。物質的な意味では、公的部門の雇用は、国家から国民への賃金や退職金をひとまとめにした富の移転だと理解できるだろう。こうした急成長を遂げる公的部門において、湾岸アラブ諸国の国民の日常的な活動や責任というものが、国家の以降にそって配置されているのであるが、こうしたことの社会・文化的影響はまだ分析されていない。

第二に、国家主導による開発の結果、近代的でコスモポリタンな文化資本を満載したプロジェクトが多数作り出されることとなった。湾岸地域のメガ開発プロジェクトは、I.M. ペイ、アラタ・イソザキ、ジャン・ヌヴェル、サンチアゴ・カラトラヴァといったスターキテクトを引き込み、またコスモポリタンなブランド（フェラーリ、グッゲンハイム美術館、ルーブル美術館、コーネル大学など）や、グローバルな招致活動（サッカー・ワールドカップ、アジア大会、オリンピック、MICE経済）をもたらした。この結果として発生する建設事業は、湾岸アラブ諸国がコスモポリタンな近代性の最前線に立つことを示す。また湾岸アラブ諸国の都市は、これらのことを成し遂げた国民と寛大な権威主義的支配者の世話役としての地位を讃えるトロフィーの陳列ケースとなる。とりわけ、陳列ケースとしての都市は新しいナショナリズムの焦点となり、国際的な評価をうけた象徴的な文化資本と、開催国のもてなしが演出する伝統文化が融合する場所となる<sup>4</sup>。これらの開発は、化石燃料への依存から観光や持続可能性、経済多様化への転換として語られる事が多い。

しかしながら、第三に、インフラ開発のための支出は国家から国民への富の移転の主要な結節点と見なされる。湾岸アラブ諸国の法制度によれば、例外を除いて、国民だけが土地と不動産を所有できる。こうした法制度が、あらゆるビジネスシーンで織り込まれている国民がスポンサーとなるカフアーラ制と結びつくことで、国家主導の開発に含まれる資

<sup>3</sup> Baldwin-Edwards (2011) *Labour immigration and labour markets in the GCC countries: national patterns and trends*. London School of Economics を参照。

<sup>4</sup> もてなしとナショナリズムの関係について、より詳しくは Gardner (2010) *City of Strangers*, Cornell University Press を参照。

本の一部が、国民に確実に浸透して行くことになる。都市開発は、その背後に固有の政治経済的現象を伴って進展して行くのだ。博物館、宅地開発、巨大モスク、海外有名大学のキャンパス、これらは皆それぞれ、国民に利益をもたらす開発産業を引き込む。例えば、カタールで開催予定のサッカー・ワールドカップでは 9 つのスタジアムの建設が予定されており、これは労働者や彼らを収容するためのレイバー・キャンプ、建築家、プランナー、技術者、こうした人々をもてなすための専用高級住居、そこに設置すべき学校、自動車、レクリエーション施設などが必要となる。これらの建設は膨大な事業の始まりに過ぎないが、個別の建設事業を行う毎にカタールの下請け企業が入り込み、そうした企業を通じて国家が管理する化石燃料の富が配分され、カタールの開発を進展させる。これらのカタール企業はカタール人のスポンサーを持ち、それらのスポンサーが獲得する利益は、国家から国民への富の移転として理解される。この意味において、都市開発は国家とその権威主義的支配者の政治的正統性の基盤となっているのだ<sup>5</sup>。

#### 4. アラビア半島への移民現象

こうした国家主導の開発によって構成されるシステムは、大量の労働力を必要とし、それは国内の労働力供給ではもはや賄うことができない。20 世紀が終わろうとしている頃、湾岸アラブ諸国は南アジアや東南アジアからの労働力供給に大きく依存するようになっていた。これは私専門領域である。

労働力の国境を越える移動を分析する人類学者として、私はここで簡単な分類を示そう。労働力の送り出し国では、賃金がきちんと支払われず、不完全就労や失業に陥っている潜在的な移民が、報酬の良い仕事を求めて海外に渡る。一人のブローカー、あるいは複数のブローカーが取り交わす契約の編み目を通じて、潜在的な移民は湾岸アラブ諸国の雇用にありつくことができる。過去数十年間に渡って、湾岸アラブ諸国で働く権利は商品化され、潜在的な移民は 2 年間の労働契約を購入するために 1000 ドルから 2000 ドルを支払う。こうした金銭は典型的には世帯収入から捻出されたり、家屋を抵当に入れたり、あるいは別途借金をすることで支払われる。そうして移民は湾岸に渡る。渡った先では、彼あるいは彼女は労働力を欲する人材派遣会社によって雇われるか、あるいは、直接に特定の企業に雇われる。彼あるいは彼女は典型的にはレイバー・キャンプに居住するが、その質は様々だ<sup>6</sup>。移民はスポンサーと結びつけられ、そのスポンサーは湾岸アラブ諸国でどこにでもいるありふれた人物だが、移民自身はスポンサーと直接にやり取りすることはない。むしろ、

<sup>5</sup> こうした都市開発に関する政治経済については、以下の書籍で詳細に検討される。Gardner, Andrew (2014) *How the City Grows: Urban Growth and Challenges to Sustainable Development in Doha, Qatar*. In *Sustainable Development: An Appraisal of the Gulf Region*, Paul Sillitoe, ed., Oxford: Berghahn Books (近刊)

<sup>6</sup> Gardner (2010) *Labor Camps in the Gulf States, Viewpoints: Migration and the Gulf*, Middle East Institute.

移民がやり取りするのは典型的には労働力を監督する上司やマネージャーであり、こうした監督者自身もまた移民である。もしも全てが上手くいけば、移民は自分の契約を更新することができる。一般的な移民は、こうした 2 年契約の期間を部分的に重複させることで滞在期間を延ばし、自分の労働可能年限の大半を湾岸アラブ諸国で過ごすこととなる。

ここで発生する問題は、湾岸アラブ諸国の移民制度に固有のものであるように見える。私のこれまでの研究は、こうした問題とそれらがどれほど頻繁に発生しているか、明らかにしてきた<sup>7</sup>。国際移民のパスポートは、常に雇用者に取り上げられてしまう。これは不法であるが一般的に行われている慣習である。送り出し国でブローカーに約束された賃金はしばしば実際に支払われる金額と異なる。単純に約束された賃金が支払われないということもしばしばある。移民はしばしば自分の生活環境や労働環境に問題があることを訴える。そうした中でもよく知られているのが、搾取行為もまた上司、マネージャー、ボスという雇われの移民によって行われる。しかしカファラ制度と労働契約が移民を一人のスポンサーに縛り付けるので、移民には頼る手段が何もない。移民とその家族は送り出し国のブローカーに借金を抱えたまま帰国することとなり、移民はしばしば契約期間を通じてこうした搾取に晒されることとなる。

要するに、こうした移民システムは国際的な批判を呼び寄せると同時に、アジア、アフリカ等の低開発地域の何百万人という潜在的な移民の労働機会の中心地となっているのだ。こうした対照的な二つの要素が一つに合わさっている状況を説明することは私が取り組んでいる研究のもう一つのテーマである。不可避免的に、カファラ制は移民を管理する責任をスポンサーを務める国民とそれに類似する人々に配分していることになる。移民の側からいえば、彼女あるいは彼の移民としての経験はスポンサーとの関係に大きく規定されている。それはカファラ制と移民の管理権限の配分の二つが抽象的に関係し合う中で生まれるもので、湾岸アラブ諸国の移民の経験に見る多様性を説明するものとなる。

## 5. 想像力とビジネス関係

最後に皆さんに特別に以下の話題を用意した。私の近著において、私はカタールに居住する移民であるディヴェンドラ<sup>8</sup>のエピソードについて言及している。簡潔に言えば、ディヴェンドラと彼の同僚の南アジア系の労働者達は、パレスチナ人雇用者の下であらゆる種類の深刻な問題に直面している。賃金の不払い、レイバー・キャンプでの惨めな居住環境、給与からの様々な「料金」の天引き、さらには搾取されている東南アジア系労働者に懲罰

---

<sup>7</sup> Gardner et al. (2013) A Portrait of Low-Income Migrants in Contemporary Qatar, *Journal of Arabian Studies* 3(1) を参照。

<sup>8</sup> これは私が 2008 年から 2010 年まで調査した移民労働者で、仮名である。

を与えるために雇用者が彼らを訴えた事例など、様々だ。こうした問題が発生した初期に、ディヴェンドラと同僚達はカタル人のスポンサーに直接会って、パレスチナ人雇用者の問題を訴え出ることができた。スポンサーと直接会った後、問題はすぐになくなったが、次の新たな問題が発生した。彼らの雇用主であるパレスチナ人は、彼らがスポンサーと会えないようにして、これ以降は上記の様な問題がディヴェンドラがカタルを去るまで継続された。こうした聞き取り調査の断片は、私がこれまでに論じてきたような、カフアーラ制で構造化された様々に出自が異なる移民の間の関係について言及するものであり、また湾岸アラブ諸国の移民が現地で直面する様々な問題は、別の移民によって引き起こされているという事実を物語る。しかしここで私が焦点を当てたいのは、ディヴェンドラの雇用者が、労働者とカタル人スポンサーの接触を禁じた点であり、なぜならこれは湾岸アラブ諸国に関する研究者としての私自身の経験に大きく影響を与えたからだ。

ここ10年の間、湾岸アラブ諸国で現実には発生している国境を越えた存在を、どのように描写したらいいのかという研究目標を自己に問いかけてきた。この研究目標は、政治的には危ういもので、しばしばどうすればこの研究を進める許可を獲得できるだろうかと思ひ悩んだ。私のこの10年間の経験では、アラビア半島の労働移民による生きた経験をより良く理解しようという私の関心に対して、時には強力な抵抗に直面した。しかしほとんど常に、私が直面した抵抗は別の移民からもたらされた。こうした移民達は、しばしば自営のような形態で、バハレーン人やカタル人やその他の決定権限を持つ現地の国籍を有する人々への窓口のような役回りをしてきた。ディヴェンドラのように、私は自分の研究目標に対する重大な抵抗に直面したときには、こうした窓口係を迂回して関係のあるその国の国民と直接話をするという方法を発見した。私の経験では、窓口係の後ろにいる湾岸アラブ諸国の国民はみな隠すところがなく、私の研究目標に興味を持ち、協力を引き受けてくれた。彼らの承認のおかげで、私はそれ以上の困難なく研究を進めることができた。

カタル大学での外国人教員としての私の経験と、工業地帯でのディヴェンドラの労働者としての経験は全く異なるものではあるが、どちらもカフアーラ制度によって確立された権力と統治の階層構造に関係するもので、またこの階層構造の中で接触と連絡を管理する窓口係の役割に関連するものだ。外国人労働者からなる軍隊、大臣達は現地の国民から監視されながらも彼ら大臣達が使うのは外国人の部下であること、スポンサーはいつも不在で外国人の代理人が彼らの窓口となる、そうした湾岸アラブ諸国で確立している文脈の中で、こうした階層構造を通じた情報の浸透を管理・監督することには、しばしば権力や利益が介在する。窓口係という階級の存在は、この地位でビジネスを行う上で、そのビジネスが建設業であれ、デベロッパーであれ、さらには学術的な研究であれ、社会的事実である。私が湾岸の諸組織が経験したことのなかで出自の異なる外国人達が果たす顕著な役割

を思い浮かべれば、おそらくはこの種の窓口係の階級は、今日のアラビア半島が持つ多様化した人間のつながりから必然的に生み出されたものかもしれない。

私の経験は単にこの種の外国人の階層の役割を窓口係としてのみ指摘しようというのではない。彼らが持つもう一つの役割、イマジニア<sup>9</sup>としての役割も指摘したい。この人物は情報やコミュニケーションの結節点となっており、こうした窓口係は（例えばディヴェンドラの事例のように）自分の個人的な利益のために情報の受け渡しを管理しているだけでなく、自分の上司にあたる言質国籍を持つアラブ人にとって、何が文化的に、また社会的に適切かどうかを評価し、考え、判断しているのだ。ここで重要なのは、こうした窓口係は自分の上司と民族的、文化的あるいは階級的になにがしかを共有しているのだが、しかし彼らは湾岸社会や湾岸の文化に関する実質的な洞察もなければ、それに触れたこともない。なぜなら、排外的な権威主義的部族主義が、湾岸アラブ社会には今日新たに発生しているからである。私の経験では、こうした窓口係のイマジニアとは、窓口係が現地社会を特徴づけるものとして抱いている、現地社会に対する関心や欲望といった想像された概念のまとめりである。既にあげた二つの事例において、こうした想像上のカタル人の関心というものは、カタル人自身によって解放されたのであった。要するに、イマジニアによって生み出された、現地のアラブ人の通念や関心というものと、窓口係の想定を越えた実際の関心や通念の間には著しい差異が発見されるということだ。

## 6. 結論

私は、ここで 4 つの相互に関連するテーマに焦点を当てた。今日の湾岸アラブ諸国の非常に独特な人口構成、GCC 諸国の開発あるいは都市開発の役割、移民労働者と移民現象、ビジネス関係におけるイマジニア、である。本稿の出だしで指摘したように、これは今日の湾岸アラブ諸国社会を完全に描こうとしたものではないが、私の経験に照らして、今日の時代に支配的な社会的、文化的、政治的、経済的関係の特徴づける断片について取り扱ったものだ。これに関する質問やコメントを歓迎する。

（日本語訳：宇都宮大学国際学部准教授 松尾昌樹）

---

<sup>9</sup> この用語は、元々は 1940 年代にアメリカのアルミニウム製造会社の Alcoa 社が作ったもので、ウォルト・ディズニーによって広く知られることとなった。この用語はまた日本のコンテンツ企業の社名にもなっている。